

●萩原朔太郎にとっての馬込

詩人の萩原朔太郎は、大正 8 (1919) 年に上田稲子と結婚、同 14 年 2 月に生まれ故郷の前橋から妻子 3 人を伴い上京します。最初に居を定めたのは大井町でした。以降、田端、鎌倉と住まいを転々とした後、大正 15 年 11 月に馬込村平張 (現南馬込三丁目) へと転入し、馬込文士村の一員となります。朔太郎は馬込の自然に触れ、その感動を「馬込村といふ所は、実に自然の明るい所だ。私は東京の郊外に、こんな明るい世界があるとは思はなかつた。(中略) 自然の中に生命があり、力があり、生活があるといふことを、私は馬込村に来て始めて学んだ」(「移住日記」『都新聞』昭和 2 [1927] 年 6 月 [『萩原朔太郎全集』第八巻]) と記しており、馬込の自然に好印象を持っていたようです。

自然美にあふれ作詩の素材に事欠かないと見えたとのか、朔太郎は室生犀星や三好達治を馬込文士村に呼び寄せ、彼らの馬込入りを大歓迎しました。朔太郎の詩論集『詩の原理』は馬込在住時代に書き上げられたものです。出版の構想は大正 6、7 年頃から始まり、約 10 年の年月を経て刊行されました。内容のすべてが書下ろしの本書は、寝食を忘れて三ヶ月で脱稿したと朔太郎が序文で書いています。この頃、朔太郎は家庭内で不安を抱えており、そんななかで朔太郎は本書の執筆に打ち込んでいたのです。

なかなか居所の定まらなかった朔太郎にとって馬込は自然に囲まれたなかで気心の知れた仲間とようやく落ち着きをもって暮らせる安息の地となるはずだったのかもしれませんが、しかし、昭和 4 年 7 月の稲子との離婚により、馬込での暮らしは長くは続きませんでした。離婚に至るまでの経過と家庭の解散は朔太郎にとって非常に大きな苦悩となり、生涯を通じて一番の痛切な実生活上の痛手となったようです。しかし、馬込に在住した文士との交流は朔太郎が馬込の地を離れた以降も続いていきました。



特集展示「萩原朔太郎と馬込の文士たち」の展示風景

開催期間: 令和4年9月 27 日~12 月 11 日

(本展示は、「萩原朔太郎大全2022」の一環として開催しました)